

魚玄機論

『魚玄機』は大正四月七月十五日発行の『中央公論』(第三十一年第八号)に掲載された鷗外九篇目の歴史小説であり、脱稿は同年七月七日である。従来この作品についてはあまり検討されていないので、本論稿では『魚玄機』執筆の動機、史料の作品への形象化、並びに作品の位相について、考察してみようと思う。

『魚玄機』執筆の動機について考察する前に、執筆の時期について触れておきたい。日記を見ると、「大正四年六月四日（金）晴。文求堂に往きて温飛卿集を買ふ。」とあり、更に「大正四年七月七日（水）雨。魚玄機を艸し畢る。」という記事から判断して、一応『魚玄機』執筆の意志が動いたのは六月四日以降は下りえないと考えられる。しかし、鶴外がこの作品執筆に用いた原史

綱氏から送られたことがわかる。そこでなお明治三十七年二月九

日付の書簡を繰って見ると

大正四年、
れる所である。しかし、『唐女郎魚玄機詩』を素材にして、執筆
しようと思ったのが大正四年であるから、史料を入手してからそ
れが作品に結晶するまで月日の懸隔が大分あり、この点が問題と
なる所である。この点については後述するとして、執筆の意志が動
き出したのがいつ頃であつたかをもう一度考えてみよう。日記に
よって鷗外の文学作品の執筆に関しての動静を探べて見ると、

「御寵贍之詩集今日一讀仕候其附錄ヲ見レバ作者ハ別品ニテ女道士兼藝者ト云フヤウナ人物ナルニソレガ又嫉妬デ別品ノ女中ヲ歐チ殺シ獄ニ下リタリトアリ實ニ芝居ニデモアリサウナ珍事ニテ面白ク存候」

五月十五日 應制の詩草成る。 二人の友を書き畢りて北原隆吉 應制の詩を書す。 應制の詩を書いて獻しまつる。

五月二十二日 我一生の題簽を書して大橋涉に交付する。

五月十四日の『二人の友』以後は『魚玄機』までは何も書いていない。とすると、先程六月四日に引いた線を一応五月半頃まで下げるといいのではないかとも思うが、鷗外は三月四日に書きあげた『津下四郎左衛門』の遺聞の調査の為めにかなり多忙な日を送つており、更に「應制の詩」「我一生の題簽」の作成等から考えて、鷗外が『魚玄機』執筆の気持を動したのは、五月下旬頃から六月初めにかけての時期だと考えて大過なからうと思う。しかし、ここで考えなければならないのは前述した書簡に見えていく如く、鷗外自身大変興味を示していくながら、この時期に執筆せず、十有余年経た後に筆を執ったという事実をどう解釈すべきであろうか。いかなる原因がそこに関与しているのであろうか。その原因を究明する時、どうも鷗外の退官という事と非常に深い関係があるようと思う。今この点について考えると、九月十六日の日記に「婦女通信予が引退の報を傳ふ。東京諸新聞の記者悉く來訪す。」とあり、更に正式に引退の事を次官大嶋健一氏に伝えたのが、十一月二十二日である。そして九月十六日引退の報が出る数カ月前の鷗外の心的状態を考えると、五月十四日に「應制の詩」を書きあげた鷗外と、七月十八日「齧齧」と言う漢詩の一句「老來殊覺官情薄」との間に、雲泥の差がある事を見逃す事は出来ない。少くとも、九月十六日引退の報が伝わる二ヵ月以前は、引退をめぐって、かなり複雑な気持を抱いていたのではないかと思う。引退の直接的な原因は不明であるが、この時期に陸軍省医務局で鷗外が身を退かなければならぬような事件があり、それ故

にもやもやとした充たされない氣持が、渦巻いていたのではないかろうか。その様な時期に『魚玄機』が書かれたという事実は注目してよいと思う。と言うのは、鷗外は魚玄機という唐代の女詩人に興味を抱いたと言うよりも、寧温飛卿により強い興味と共感を抱いたのではないかろうか。と言うのは、明治三十七年佐佐木信綱氏から『唐女郎魚玄機詩』を送られた時は、魚玄機の特殊な生き方に引かれた事は事実であるが、それから十有余年経た後に、いままで坐りなれた陸軍軍医監醫務局長の職を退ぞかなければならなかつた時、ひしひしと迫りくる老の寂しさ、不平不満、いらいらした焦燥感、空虚感を感じ、魚玄機その人よりも、唐代の複雑な社会機構の中で反骨精神を貰き、反逆的な生き方をした魚玄機の師である温飛卿により強い共感を持つて接したのではなかろうか。しかし、この作品が『温飛卿』とならずに『魚玄機』となつた所に、一考を要する問題が残されていると言わなければならないが、今の所、鷗外がこの作品を執筆しようと心を動かしたのは、退官時に生涯その反逆精神を貰き通した温飛卿という人間に、より一層興味と共感を持った為であろう。と考えて論を進めたい。

二

次にこの小説に用いられている原史料について吟味してみよう。鷗外の歴史小説にはかならず、その小説の基調をなした原史料が使われているのが常である。それは鷗外自らその参考史料を明記してあるものもあり、いなものもある。かの『寒山拾得』

の縁起に於いて「子供にした話を、殆其儘書いた。いつもと違て、一冊の参考書をも見ずに書いたのである。」と、作品成立の事情について自から書いている作品でさえ、「殆其儘書いた」と言う言葉をそのまま受け取れぬ点がある。^(注3) ところが、この『魚玄機』には参考史料として、

其一 魚玄機	三水小牘 南部新書	太平廣記 北夢瑣言	唐詩紀事 唐才子傳	全唐詩（姓名下小傳）	唐女郎魚玄機詩	唐西京咸宜觀女道士、魚玄機，字幼微，長安里家女也。……在獄中亦有詩曰、易求無價寶。難得有心郎。明月照幽隙、清風開短襟。此其美者也。
舊唐書	漁隱叢話	北夢瑣言	桐華	右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲綠翹。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本此篇、即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三引三水	小牘、云	右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲綠翹。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本此篇、即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三引三水
新唐書	北夢瑣言	唐詩紀事	玉泉子	唐詩紀事	唐詩紀事	右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲綠翹。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本此篇、即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三引三水
握蘭集	金荃集	六一詩話	南部新書	六一詩話	唐詩紀事	右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲綠翹。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本此篇、即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三引三水
漁隱叢話	漢南真稿	雪浪齋日記	溫飛卿詩集	溫飛卿詩集	唐詩紀事	右魚玄機事略、一則見太平廣記報應類二十九、題爲綠翹。後注云、出三水小牘。按三水小牘、近世所傳、皆輯本此篇、即從廣記錄出。余檢宋人續談助卷三引三水

魚玄機関係の参考史料十冊、温飛卿関係十八冊、両者の重複を省いても二十四冊と言う厖大な史料が記るされている。それ故に、従来鷗外はこの史料全部を使ったものでは無く、恐らく二三冊の

便利な史料に依ったものであろうと言われている。^(注4) 東京大学所蔵の鷗外文庫を調べて見て、参考史料本を使用したのは『唐女郎魚玄機詩』『全唐詩』(鷗外が参考史料として明記した以外の別本)『温飛卿詩集』の三冊のみであると言う結論を得たので、その点について述べてみたい。『唐女郎魚玄機詩』の巻末に「附錄魚玄機事略」が掲載されており、そこに掲載されている諸本の抄出が、鷗外自から参考史料として記るしている十冊の参考史料本である。今この史料について検討してゆくと、

とあり、「太平廣記」からの引用である事は明白であるが、更に「太平廣記」は「三水小牘」からの引用であり、「續談助(卷三)」も「三水小牘」からの引用である事がわかるが、「太平廣記」に比較して記述は簡略である。「唐詩紀事」、「全唐詩話」、「南部新書」についても同じ事が言える。よって鷗外は「太平廣記」を底本として、「三水小牘」から、魚玄機字幼微長安倡家女也倡家を取りあげている。

「北夢瑣言」から、

咸通中爲李億補闕執筆，後愛妻下山隸咸宜觀爲女道

李億、尹という官職名をあして、温璋の名を取りあげ、

「唐才子傳」からは、
復與溫庭筠交遊，有相寄篇什。嘗登崇眞觀南樓，觀新

進士題名賦詩曰：「雲峯滿目放春情，歷歷銀鉤指下生。自恨羅衣掩詩句，舉頭空羨榜中名。」觀其志意激切，使作男子。

温飛卿との交遊の事、崇眞觀に於ける賦詩を取りあげている。

「全唐詩（姓名下小傳）」は、「唐才子傳」に同文である事から考えて、闕外は『唐女郎魚玄機詩』の附録『太平廣記』を底本として、それに載っていない記事を「三水小牘」、「北夢瑣言」、「唐才子傳」並びに魚玄機の詩数篇から取捨選択し、組合せ、魚玄機伝を構成したものであろう。更に『全唐詩』を用いたであろうと考える根拠は、『唐女郎魚玄機詩』の「感懷寄人」という漢詩の八連目が「仍羨世人□」と五字目が欠字になっているが、小説中に「鉢」の字を補っている所から考えて、『全唐詩』による補筆であろうと思われる。

一方温飛卿の方はと云うと、これも用いた参考史料本は『温飛卿詩集笺注』のみであり、詩集の巻頭に「舊唐書本傳」があり、次に附録諸家詩評として「全唐詩話」以下闕外が記している参考史料本の抄出が載っている。今具体的に検討していくと、

温庭筠者、太原人、本名岐、字飛卿、（新書一庭筠彦博孫）

大中初應進士……爲三方城尉，再遷隋縣尉卒（「舊唐書本傳」）

「舊唐書本傳」を基として、これに無いエピソード的な記事を、「全唐詩話」から、

（紀事作又）……宣宗嘗賦詩，上旬有金步搖，未能對遺，求進士對之，庭筠乃以玉條脫續之，宣宗賞焉……宣宗嘗唱菩薩蠻詞，丞相令狐绹其修撰，密進之，戒令勿洩而遽言於人。

「唐詩紀事」から、

令狐绹曾以舊事訪於庭筠，對曰：事出南萃（一作萃陽下同）非僻書也，或冀相公變理之暇時宜賢古。

「北夢瑣言」から、

庭筠又每歲舉場多爲舉人假手。侍郎沈詢知舉別施鋪席，

「桐薪」から

溫貌甚陋，號溫鍾馗。

「玉泉子」からは、

故庭筠卒不中第，其姉趙韜之妻也。

「新唐書」（「舊唐書本傳」に含まれており、本傳と異なる所だけ『新書曰』として記してある。）からは、

庭筠思神速，多爲人作文，大中末試有司廉視尤謹。庭筠不樂上書于餘言然。私上援者已八人。

右の文を引用しており、「六詩話」、「滄浪詩話」、「陔周詩話」、

「三山老人語錄」、「雪浪齋日記」、「漁隱叢話」、「南部新書」等は

三

詩評などが記述されており、直接小説の史料としては用いられて

いない。「握蘭集」、「金鑑集」、「漢南真稿」の三冊については「舊

唐書本傳」の中に「庭筠著述頗多」とあり、具体的には「新唐

書」に「握蘭集」以下の書名のみが載っている所から考へて、こ

の書には目を通していないと思われる。あるいは、既にこの時

代にこれらの本は伝わっていなかつたのではないだろうか。^(注)もし

この事を正しいとするならば、当然鷗外も見る由も無かつたであ

らうと思われる。よつて、「舊唐書」（新唐書）を基として、

「全唐詩話」、「唐詩紀事」、「北夢瑣言」、「桐薪」、「玉泉子」から

記事を取捨選択し、それらを組合せて溫飛卿伝を構成したものと

思われる。

こうして魚玄機伝と溫飛卿伝とを形作り、鷗外はそれらを組合

わせ、配列し直したに違いない。（この様な史料の分解、整理、統合は『大鹽平八郎』『ぢいさんばあさん』等に見られる。）し

かも、その整理、統合の仕方を見ると、鷗外は史料によって魚玄

機伝を形成はしてみたものの、漠然としか魚玄機の一生を把握出

来なかつたのではないかと思う。つまり、肝心な魚玄機自身の性

格、心の動きというものが、如実に把握出来なかつたのではない

だろうか。そこで鷗外は史料を離れて、自由に想像を飛躍させさせ

る事によつて、（歴史離れをすること）魚玄機を構成したもので

ある。但し、温飛卿に関する限り魚玄機の場合と違つて、ほぼ

史料がそのままの形で使われており、それはあたかも『安井夫

人』の場合とよく似ている。

以上検討して來た史料を、鷗外がどの様な形で作品に形象化していったか。その点について考察してみよう。

温飛卿関係の史料に於いて、魚玄機に關する記述は全く無い。

し、魚玄機の方ではわずかに「唐才子傳」に見える『與溫庭筠交遊有^シ相^ニ寄篇什^ニ』という箇所と、『唐女郎魚玄機詩』である

が、そこには温と魚玄機との交渉があることはうかがい知ることが

できるが、小説に於いて、「或る日温が魚家に訪ねて來た。美し

い少女が詩を作ると云ふ話に、好奇心を起したのである。」と温

と魚玄機とが対面する場面を描く事によつて、史料に厚みを加えて

いる。この対面の場面を描く為に鷗外が設定した伏線こそ、二つの史料を有機的に結びつける重要なポイントとなつてゐる。すな

わち、「舊唐書本傳」の中の一節（『裴誠令狐濱之徒相與^ニ飲^ス。酣^{スルゴト}醉終日。由^レ是、累年不^レ第^セ』）を小説に於いては、「魚家の妓數人

が度々或る旗亭から呼ばれた。客は宰相令狐綯の家の公子で令狐

濱と云ふ人である。……それに今一人の相伴があつて、此人は温

姓で、令狐や斐に……妓等が魚家に歸つて、頻に温の噂をするの

で、玄機がそれを聞いて……妓等も亦温に逢ふ毎に玄機の事を語

るやうになつた。」と、わずか二十字足らずの史料を巧みに使う

事によつて、温と玄機との交渉を美事に描ききつてゐる。

さて、この様に結び合わされた史料は、いかなる形で形象化さ

れていただらうか。

(A) 史料をそのままの形で小説中に導入する事によつて。

(1) 小説中にある漢詩「賦得江邊柳」、「贈鄰女」、「寄飛卿」、「感懷寄人」、「冬夜寄溫飛卿」（小説中にある『満庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈』の題）は、『唐女郎魚玄機詩』から採択したのである。

(2) 「客有下宴于機室者因漫於後庭當瘞上一見三青蠅數十集於地驅去復來詳視之如若有血痕且腥客既出猶語其僕歸復語其兄其兄爲府衙卒……發之而綠翹貌如生卒遂錄玄機京兆府吏詰之辭伏」（太平廣記）を

小説に於いては、「其中の一人が涼を求めて觀の背後に出来ると、土を取つた跡らしい穴の底に新しい土が填まつてゐて、其上に緑色に光る蠅が群がり集まつてゐた。……これを自己の従者に語つた。従者は又これを兄に語つた。兄は府の衙卒を勤めてゐるものである。……綠翹の尻は一尺に足らぬ土の下に埋まつてゐたのである。京兆の尹温璋は衙卒の訴に本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫も辯疏することなくして罪に服した。」となつてゐる。

(3) 溫飛卿關係については既に述べた通り、二三の箇所をのぞいては、ほん原史料がそのままの形で使われてゐると云つても差支えない。一例をあげるならば、「醉而犯夜爲溫飛卿關係」（舊唐書本傳）の史料が小説第自至長安致書公卿間」（舊唐書本傳）の史料が小説に於いては、「或る夜妓院に酔つて虞候に撃たれ、面に創を負ひ前齒を折られたので、怒つてこれを訴へた。絹が温

と虞候とを對決せざると、虞候は盛んに温の汗行を陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に入つて、要路に上書して分疏した。」となつてゐる。

(B) 史料を何らかの形に変する事によつて。

(1) 史料の不完全さを補筆する事によつて。

(1) 「一日、機爲鄰院所^{フル}邀將行試^{カントニ}翹曰無^{ノカレル}出、若^{シラバ}客但^{タク}云在某處^{シテ}……綠翹迎門曰適某客來」（太平廣記）とあって具体的に客の名が明記されていない。それを鷗外は「陳某」として、小説中に登場させている。勿論この補筆は史料によつて行われたものではない。史料による補筆の例は「京兆府吏……至秋竟^リ之」（太平廣記）の記述を「北夢瑣言」から補つて、完全な形にしてゐる。すなわち、「京兆尹、温璋殺^ス之」

(B) 史料を踏えて發展させる事によつて。

(1) 「咸通中爲李億補闕執^リ箕帝後愛妻^ト山隸^ハ咸宜觀^ニ爲女道士」（北夢瑣言）史料中「李億」「愛妻」「爲女道士」という語句から、魚玄機と李億との交渉を描き出してい

(2) 采蘋との関係も「唐女郎魚玄機詩」の「贈鄰女」という漢詩から導き出されたものである。

(1) 「翹曰自執巾盥數年實自檢御不令有似是之過致忤尊意……幸鍊師無疑機愈怒裸而答百數。」

但・シ・フ・無・シ・之。……翹今必・キ・於・毒・手。」(太平廣記)
印以外の史料は切捨てられている。と云うのは、あくまで
鷗外は嫉妬に懊惱する魚玄機に焦点をあてるべく、不要
な史料をのぞいたのである。更に注目したいのは、印

を附けた所である。この箇所を小説に於いて、「玄機は床
の上に跪いてゐる女を押し倒した。女は憐れて目を瞑つて
ゐる。『なぜ白状しないか』と叫んで玄機は女の吭を扼し
た。女は只手足をもがいてゐる。玄機が手を放して見る
と、女は死んでゐた。」と、原史料の笞殺の残酷性を捨て
て、むしろ過失死とも取れるが如き記述をしている。勿論
ここに、鷗外が魚玄機に寄せる暖い日が光っているのを、
見逃す事は出来ない。

(2) 溫飛卿についても同様の事が言える。「宣宗愛之唱苦薩蠻
詞，丞相令狐綯假其修撰，密進之，戒令勿入，而遂言之於
人」(全唐詩話)の史料を踏えて、「然るに温は酔つて其
事を人に漏した」と酔中の行為に帰せしめたのは、鷗外の
温飛卿に寄せる愛情の為であろう。

史料を全く離れる事によつて。

魚玄機について叙述を進めてゆく内に、どうしても史料で
解釈がつかない箇所が出てき、鷗外はそこに魚玄機の嫉妬
心の発現、名譽欲、性欲の発現等の独創力を導入してい
る。例へば、

(1) 「この花の如き十五歳の少女には、些の嬌羞の色もなく、
……」

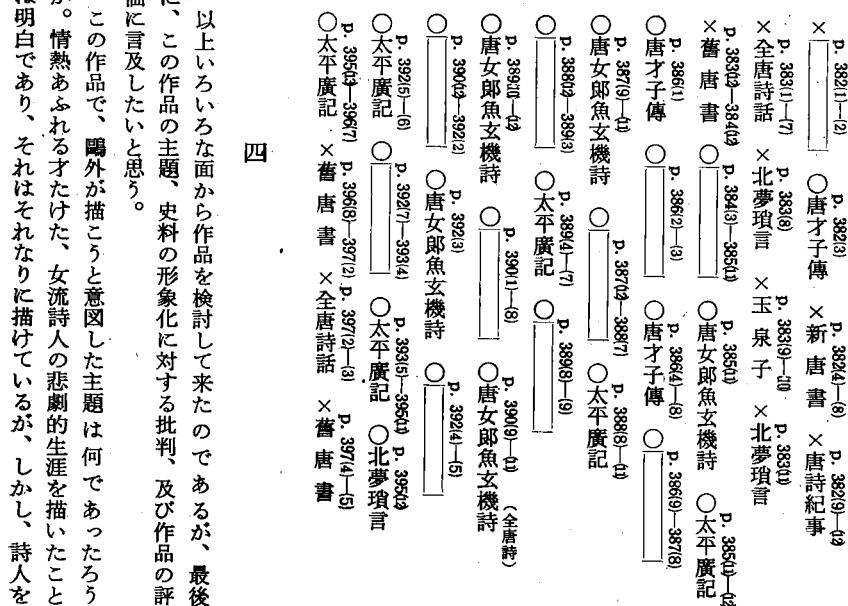
(2) 「李が身を以て、近かうとすれば、玄機は回避して、強ひ
て逼れば號泣するのである。……玄機は泣く時に、一旦避
けた身を李に靠せ掛けたのも苦痛に堪へぬらしく泣くので
ある。」

(3) 「玄機は眞に女子になつて、李の林亭にゐた日に知らなか
つた事を知つた。」

概して、魚玄機を描くにあたつて、「歴史離れ」の態度でのぞみ、
温飛卿を描くにあたつては、「歴史其儘」の態度で記述されてい
る。そして、魚玄機と温飛卿関係の史料の統合(構想)の仕方を
見ると、左記の如くなつてゐる。

○印は魚玄機関係の記述、×印は温飛卿関係の記述、□は
Fiction、頁数は鷗外全集—岩波版、昭和廿六年刊、第六巻によ
る。

○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(1)-(7)	P. 377(8)-(9)	P. 377(9)-(11)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(10)-(11)	P. 377(11)-(12)	P. 377(12)-(13)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(13)-(14)	P. 377(14)-(15)	P. 377(15)-(16)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(16)-(17)	P. 377(17)-(18)	P. 377(18)-(19)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(19)-(20)	P. 377(20)-(21)	P. 377(21)-(22)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(23)-(24)	P. 377(24)-(25)	P. 377(25)-(26)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(27)-(28)	P. 377(28)-(29)	P. 377(29)-(30)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(31)-(32)	P. 377(32)-(33)	P. 377(33)-(34)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(35)-(36)	P. 377(36)-(37)	P. 377(37)-(38)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(39)-(40)	P. 377(40)-(41)	P. 377(41)-(42)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(43)-(44)	P. 377(44)-(45)	P. 377(45)-(46)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(47)-(48)	P. 377(48)-(49)	P. 377(49)-(50)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(51)-(52)	P. 377(52)-(53)	P. 377(53)-(54)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(55)-(56)	P. 377(56)-(57)	P. 377(57)-(58)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(59)-(60)	P. 377(60)-(61)	P. 377(61)-(62)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(63)-(64)	P. 377(64)-(65)	P. 377(65)-(66)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(67)-(68)	P. 377(68)-(69)	P. 377(69)-(70)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(71)-(72)	P. 377(72)-(73)	P. 377(73)-(74)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(75)-(76)	P. 377(76)-(77)	P. 377(77)-(78)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(79)-(80)	P. 377(80)-(81)	P. 377(81)-(82)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(83)-(84)	P. 377(84)-(85)	P. 377(85)-(86)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(87)-(88)	P. 377(88)-(89)	P. 377(89)-(90)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(91)-(92)	P. 377(92)-(93)	P. 377(93)-(94)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(95)-(96)	P. 377(96)-(97)	P. 377(97)-(98)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(99)-(100)	P. 377(100)-(101)	P. 377(101)-(102)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(103)-(104)	P. 377(104)-(105)	P. 377(105)-(106)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(107)-(108)	P. 377(108)-(109)	P. 377(109)-(110)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(111)-(112)	P. 377(112)-(113)	P. 377(113)-(114)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(115)-(116)	P. 377(116)-(117)	P. 377(117)-(118)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(119)-(120)	P. 377(120)-(121)	P. 377(121)-(122)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(123)-(124)	P. 377(124)-(125)	P. 377(125)-(126)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(127)-(128)	P. 377(128)-(129)	P. 377(129)-(130)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(131)-(132)	P. 377(132)-(133)	P. 377(133)-(134)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(135)-(136)	P. 377(136)-(137)	P. 377(137)-(138)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(139)-(140)	P. 377(140)-(141)	P. 377(141)-(142)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(143)-(144)	P. 377(144)-(145)	P. 377(145)-(146)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(147)-(148)	P. 377(148)-(149)	P. 377(149)-(150)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(151)-(152)	P. 377(152)-(153)	P. 377(153)-(154)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(155)-(156)	P. 377(156)-(157)	P. 377(157)-(158)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(159)-(160)	P. 377(160)-(161)	P. 377(161)-(162)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(163)-(164)	P. 377(164)-(165)	P. 377(165)-(166)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(167)-(168)	P. 377(168)-(169)	P. 377(169)-(170)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(171)-(172)	P. 377(172)-(173)	P. 377(173)-(174)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(175)-(176)	P. 377(176)-(177)	P. 377(177)-(178)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(179)-(180)	P. 377(180)-(181)	P. 377(181)-(182)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(183)-(184)	P. 377(184)-(185)	P. 377(185)-(186)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(187)-(188)	P. 377(188)-(189)	P. 377(189)-(190)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(191)-(192)	P. 377(192)-(193)	P. 377(193)-(194)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(195)-(196)	P. 377(196)-(197)	P. 377(197)-(198)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(199)-(200)	P. 377(200)-(201)	P. 377(201)-(202)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(203)-(204)	P. 377(204)-(205)	P. 377(205)-(206)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(207)-(208)	P. 377(208)-(209)	P. 377(209)-(210)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(211)-(212)	P. 377(212)-(213)	P. 377(213)-(214)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(215)-(216)	P. 377(216)-(217)	P. 377(217)-(218)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(219)-(220)	P. 377(220)-(221)	P. 377(221)-(222)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(223)-(224)	P. 377(224)-(225)	P. 377(225)-(226)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(227)-(228)	P. 377(228)-(229)	P. 377(229)-(230)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(231)-(232)	P. 377(232)-(233)	P. 377(233)-(234)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(235)-(236)	P. 377(236)-(237)	P. 377(237)-(238)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(239)-(240)	P. 377(240)-(241)	P. 377(241)-(242)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(243)-(244)	P. 377(244)-(245)	P. 377(245)-(246)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(247)-(248)	P. 377(248)-(249)	P. 377(249)-(250)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(251)-(252)	P. 377(252)-(253)	P. 377(253)-(254)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(255)-(256)	P. 377(256)-(257)	P. 377(257)-(258)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(259)-(260)	P. 377(260)-(261)	P. 377(261)-(262)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(263)-(264)	P. 377(264)-(265)	P. 377(265)-(266)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(267)-(268)	P. 377(268)-(269)	P. 377(269)-(270)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(271)-(272)	P. 377(272)-(273)	P. 377(273)-(274)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(275)-(276)	P. 377(276)-(277)	P. 377(277)-(278)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(279)-(280)	P. 377(280)-(281)	P. 377(281)-(282)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(283)-(284)	P. 377(284)-(285)	P. 377(285)-(286)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(287)-(288)	P. 377(288)-(289)	P. 377(289)-(290)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(291)-(292)	P. 377(292)-(293)	P. 377(293)-(294)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(295)-(296)	P. 377(296)-(297)	P. 377(297)-(298)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(299)-(300)	P. 377(300)-(301)	P. 377(301)-(302)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(303)-(304)	P. 377(304)-(305)	P. 377(305)-(306)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(307)-(308)	P. 377(308)-(309)	P. 377(309)-(310)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(311)-(312)	P. 377(312)-(313)	P. 377(313)-(314)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(315)-(316)	P. 377(316)-(317)	P. 377(317)-(318)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(319)-(320)	P. 377(320)-(321)	P. 377(321)-(322)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(323)-(324)	P. 377(324)-(325)	P. 377(325)-(326)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(327)-(328)	P. 377(328)-(329)	P. 377(329)-(330)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(331)-(332)	P. 377(332)-(333)	P. 377(333)-(334)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(335)-(336)	P. 377(336)-(337)	P. 377(337)-(338)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(339)-(340)	P. 377(340)-(341)	P. 377(341)-(342)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(343)-(344)	P. 377(344)-(345)	P. 377(345)-(346)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(347)-(348)	P. 377(348)-(349)	P. 377(349)-(350)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(351)-(352)	P. 377(352)-(353)	P. 377(353)-(354)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(355)-(356)	P. 377(356)-(357)	P. 377(357)-(358)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(359)-(360)	P. 377(360)-(361)	P. 377(361)-(362)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(363)-(364)	P. 377(364)-(365)	P. 377(365)-(366)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(367)-(368)	P. 377(368)-(369)	P. 377(369)-(370)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(371)-(372)	P. 377(372)-(373)	P. 377(373)-(374)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(375)-(376)	P. 377(376)-(377)	P. 377(377)-(378)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(379)-(380)	P. 377(380)-(381)	P. 377(381)-(382)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(383)-(384)	P. 377(384)-(385)	P. 377(385)-(386)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(387)-(388)	P. 377(388)-(389)	P. 377(389)-(390)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(391)-(392)	P. 377(392)-(393)	P. 377(393)-(394)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(395)-(396)	P. 377(396)-(397)	P. 377(397)-(398)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(399)-(400)	P. 377(400)-(401)	P. 377(401)-(402)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(403)-(404)	P. 377(404)-(405)	P. 377(405)-(406)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(407)-(408)	P. 377(408)-(409)	P. 377(409)-(410)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(411)-(412)	P. 377(412)-(413)	P. 377(413)-(414)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(415)-(416)	P. 377(416)-(417)	P. 377(417)-(418)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(419)-(420)	P. 377(420)-(421)	P. 377(421)-(422)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(423)-(424)	P. 377(424)-(425)	P. 377(425)-(426)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(427)-(428)	P. 377(428)-(429)	P. 377(429)-(430)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(431)-(432)	P. 377(432)-(433)	P. 377(433)-(434)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(435)-(436)	P. 377(436)-(437)	P. 377(437)-(438)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(439)-(440)	P. 377(440)-(441)	P. 377(441)-(442)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(443)-(444)	P. 377(444)-(445)	P. 377(445)-(446)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(447)-(448)	P. 377(448)-(449)	P. 377(449)-(450)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(451)-(452)	P. 377(452)-(453)	P. 377(453)-(454)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(455)-(456)	P. 377(456)-(457)	P. 377(457)-(458)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(459)-(460)	P. 377(460)-(461)	P. 377(461)-(462)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(463)-(464)	P. 377(464)-(465)	P. 377(465)-(466)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(467)-(468)	P. 377(468)-(469)	P. 377(469)-(470)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(471)-(472)	P. 377(472)-(473)	P. 377(473)-(474)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(475)-(476)	P. 377(476)-(477)	P. 377(477)-(478)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(479)-(480)	P. 377(480)-(481)	P. 377(481)-(482)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(483)-(484)	P. 377(484)-(485)	P. 377(485)-(486)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(487)-(488)	P. 377(488)-(489)	P. 377(489)-(490)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(491)-(492)	P. 377(492)-(493)	P. 377(493)-(494)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(495)-(496)	P. 377(496)-(497)	P. 377(497)-(498)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(499)-(500)	P. 377(500)-(501)	P. 377(501)-(502)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(503)-(504)	P. 377(504)-(505)	P. 377(505)-(506)
○太平廣記	○	○太平廣記	○	P. 377(507)-(508)	P. 377(5	



悲劇へと誘っていく過程の叙述に問題がありそうである。つまり、悲劇への要因を作品中から指摘し得るものは、

四

以上いろいろな面から作品を検討して来たのであるが、最後に、この作品の主題、史料の形象化に対する批判、及び作品の評価に言及したいと思う。

この作品で、鷗外が描こうと意図した主題は何であったろうか。情熱あふれる才だけた、女流詩人の悲劇的生涯を描いたことは明白であり、それはそれなりに描けているが、しかし、詩人を

③ 魚玄機の性欲の発現。
の三点で、これらが有機的に統一された形でカタストロフィへと導かれていれば問題はないが、どうもこの要因相互の緊密性に欠けているようと思われる。一体この様に主題への過程の叙述が鮮明な原因は何であろうか。今その原因を究明するにあたって、史料の形象化の仕方を再検討してみよう。

各々の史料についての「歴史離れ」の仕方は、それぞれ巧みであるが、悲劇への過程の叙述にあたって「歴史離れ」の方向が不統一であり、からうじて史実を真いて全体をなしているのが、前述した悲劇への諸要因である。そして更に言うならば、鷗外の魚玄機の描き方が、非常に軽く表面をなせており、火の様な恋愛に（その中には、当然、嫉妬や性欲の問題も含まれてくると思うが）身を投してゆく魚玄機を描けなかつた所に、この作品の致命的な欠陥があつたと言わざるをえない。その原因是、鷗外が反逆の詩人温飛卿に限りない共感を持ちながら、魚玄機を描いたという点である。心の中では、より強く共感した温飛卿に焦点をあてながら、鷗外の筆は意志に反して魚玄機に向けられており、それ故に、魚玄機を描きながらも、どこか心の中の温飛卿に引かれ、自由に魚玄機を描けなかつたのであろうと思う。それと言うのも、鷗外の退官を前にして嵐の如き心的状態の中で生みだされた

という特殊な事情が、介入したためであろう。その為に鷗外の眞の氣持が卒直に吐露されず、内に込められてしまつた為に、魚玄機にしても、温飛卿にても、やや中途半端な人物に定着してしまつたのではなかろうか。鷗外の卒直な氣持の吐露は、引退の報が新聞に伝えられた翌日（大正四年九月十七日）に書きあげた『最後の一匁』をまたなければならないのである。

作品を退官時の不平不満との関係に於いて論じてきただが、それではあまりに鷗外がスケールの小さい人物になるのではないか、との反駁も起らう。現に、平岡敏夫氏は、退官時の不平不満説を主張する唐木順三氏に反駁して、大正四年九月十六日「婦女通信」が引退を報じた翌日の「読売新聞」の記事を引用し、更に歴代医務局長在任期間を調べ、「そこに心ならずも退官する理由はなにもなかつた」と述べ、「更にその不平不満を作品に結びつけたとき、いささか鷗外のスケールが小さくなつてくるうらみがある」と言い、「詩や作品にはの見えている鬱憤めいた匂は底流の上にうかぶ泡にすぎなかつた」と述べているが、はたしてそうであらうか。私は唐木説に賛同を禁じえない。なぜならば、表出のあまり良くない鷗外が、引退の報が出たからと云つて、まだ医務局長という公的な地位にあることを考え、更に、新聞という公的機関での発言どうい点を合わせて考慮してみると、引退の心境の披瀝を掲載した「読売新聞」も絶対的な切り札にはなりえないのではなかろうか。又、かつて『陸軍軍医学校五十年史』を調べた事があるが、確かに鷗外の医務局長在任の期間は長いが、停年まで務めずに退官したという点を考えなければならない。秩序を破

壊することをなによりも嫌つた鷗外が、その職責を完遂せずに退いた所に何かあるのではなかろうか。更に、「船賦」の詩、「空車」『羅江抽斎』の冒頭の述志等に表わされた大なる不平不満は、やがて抽斎といふ偉大な人間像に向かって歩を進める内に、いつしか不平不満というちっぽけなものを大きな人間性の中で済められ、昇華されていったのである。そんな境地を「鏡潮楼閑話」の中で、『此等の伝記を書くことが有用であるか無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくて書いている。』と述べている。鷗外の不平不満は決して平岡氏の言う如く、底流の上に浮ぶ泡にすぎなくはなかつた。不平が不平として終るならば、なるほど、それはスケールの小さい俗物であるが、その大なる不平が抽斎を追求するうちに、大なるシンパシーとなり、愛情となり、尊敬となつて次第に昇華していくうちに不平不満が淨化され、やがてあの様な偉大な傳記小説を生みだしたのであろう。

とまれ、今問題にしている『魚玄機』の「歴史離れ」の仕方は、どうも稻垣達郎先生が『安井夫人』で考察した如く、「二つの床の間に、寝苦しそうに寝てゐる。」と言つても過言ではなかろう。それは、大正四年九月に発表された『ぢいさんばあさん』（『新小説』、第二十年第九卷）の如く、歴史のかたい繋縫はなく、史料が完全に作品に定着し、結晶度の高い作品（私は鷗外の歴史小説の傑作であると考えている）から比較すると、数段低い位置に甘んじなければならないが、退官をめぐつて織りなされた鷗外の平穏ならざる心的状態が内的な形を取つており、鷗外の歴史小説の流れを考える時、作品の結晶度は高くないにしても、

重要な意味を持った作品である事には変りがないと思う。

注 1 「唐女郎魚玄機」(土禮居藏宋版)を清の道光元年に覆刻し

たもの)——中國線装本、縦二十六・二cm、横十五・五cm——
一丁(表)の右側に毛筆(黒墨)で「佐々木信綱君将来」と
と陽外の書入があり、その下に「陽外藏書」の押印があ

る。そして、「贈鄰女」の詩の上部余白に毛筆(黒墨)で、
「隨園詩話卷九云易求無價寶難得有心郎女眞薰蘭詩也」と
書き込みがある。——東京大学所蔵陽外文庫本。

2 陽外の日記、書簡及び「津下文書」(天理大学の森潤三
郎氏旧蔵の陽外文庫本)等によつて窺う事ができる。「津
下文書」については、私の卒業論文中に「津下四郎左衛
門」の史料として掲げてある。

3 従来この原史料は「寒山子詩集序」であると言われてい
るが、東京大学所蔵の陽外文庫目録には「釋日陰『寒山詩
闡提起聞』」が載つてゐる所から考えて、これらの本が『寒
山拾得』執筆にあずかったのではないだろうか。しかし、
現在「釋日陰『寒山詩闡提起聞』」の原本が東京大学に見
つからないので断言することはできないが。

4 稲垣達郎先生は「安井夫人」について「——歴史其儘と
歴史離——(文学)第十四卷第十二号、昭和二十一年十
二月号)という論文の中で「又『魚玄機』のやうに、二十
四部におよぶ参考書を附記してゐながら、その實、必ずし
も多くの漁つたのではなく、便利な数本に據つたのではな
いかと考えられる場合もあるやうである。『魚玄機』の典

據については、わたしはそのやうに判断してゐる」(四四
頁)と述べておられる。

5 「全唐詩」は東京大学所蔵の陽外文庫の中にある。(陽
外藏書印あり)この本を陽外が調べたであろう事は推測に
難くない。

6 「溫飛卿詩集箋注」(秀楚草堂原本)宣統二年五月出版、
九卷四冊本。但し、陽外は一巻から四巻まで、五巻から九
巻までの二冊本に製本し直している。一巻と五巻の一丁の
右下隅に「陽外藏書」の押印がある。——東京大学所蔵陽
外文庫本。

7 「中国歴代図書辞典」(一名中国歴代芸文志)——中華
民国四十五年十一月初版。本公司編輯部編著、浦家麟発行
遠東図書公司出版——に依ると「唐書藝文志」に「溫庭筠
握蘭集三卷、又金筌集十卷、詩集五卷、漢南真蘂十卷」と
あるのに「宋史藝文志」によると「溫庭筠漢南真蘂十卷、
又集十四卷、蘭握集三卷、記室備要三卷、詩集五卷」とあ
り、すでに「金筌集」の名が見えない。「元史新編藝文志」
になると、溫庭筠の著書の名は全くみえない。以上の事か
ら考えて、唐代には「漢南真蘂」、「金筌集」、「握蘭集」と
あつたものが、宋代には「漢南真蘂」、「握蘭集」の二冊と
なり、これらも元代に伝わらなくなつてしまつたのではないか
と思われる。

8 雑誌「解釈と鑑賞」(昭和三十五年秋の臨時増刊号、至
文堂刊)「近代作家の研究」法の中の「森陽外の歴史小説

と史伝』一〇一頁参照。

附記

1 本論者は一昨々年早大国文学会（1961.10.29（日）於小野講堂）に於いて「森鷗外の歴史小説『魚玄機』の原史料について」という題で研究発表したものに、再考を加え、整理したものであるが、当時は筑摩版の注釈鷗外全集も発刊されておらず、今度それに接し、有益なる示唆（特に魚玄機の性欲の叙述を Fiction と考えていたが、平塚雷鳥氏と「青鞆」との関係に於いて、尾形伊氏は注を付けられている）を受けた

点もあるし、又史料について、結論について相違も見られます。そこで、ここに発表し、助言と批判を賜わりたいと思います。
2 東京大学所蔵の鷗外文庫閲覧に際し、青野伊予兒氏、藤堂明保氏、尾上兼英氏、大野実雄氏、船津富彦先生の配慮を賜わり、研究発表に際し、川副国基先生、紅野敏郎先生、大矢根文次郎先生、船津富彦先生、上野理氏、中沢保氏の懇切な御指導と助言を賜り、更に、今度の発表に際し、稻垣達郎先生の御指導を受けたことを合せ記して、ここに感謝の意を表したい。

—一九六三、十二、十五—

報告

早稲田大学国語学会の動向

早稲田大学国語学会ができたのは、昭和三十六年十二月二日です。以後、十月一日から始まって九月三十日に終わる会計年度を繰り返すこと二年、会員数は百人ちょっとですが、例会の出席者は三十人くらいの、まとまりのいい若い学会です。会員は早大の教員、卒業生、学生が中心です。会の特色は、例会には必ず会長の時枝先生が出席されることと、どちらかといふ内容の研究発表です。以下、例会の題目と発表者の氏名を挙げ

ておきます。

第一回（昭和37・4）現代語法ノート「デス」の「用法」「どろんけん」
辻村敏樹。「どろんこ」と

5）平安貴族の言語生活 岩渕匡。講式の音声の一考察 金井英雄。第三回（37・6）

源氏物語の語法 「奉れ」について 堀内武雄。戦後の漢字政策をめぐって 石丸久。第四回（37・9）所謂準体助詞の「の」について 山口佳也。今昔物語の語法一二

桜井光昭。第五回（37・10）日本語・朝鮮語の対照研究に関する検討 竹端燐一。馬琴日記に見られる近世言語生活の一端 石井久治郎。第六回（37・12）研究課題の求め方について 時枝誠記。中国の文字改革

の基準について 陣内宣男。第七回（38・1）時枝誠記氏の「和歌史研究の一観点」を読む 藤平春男。第八回（38・5）イントネーションのはなし 宮地裕。第九回（38・6）説話文と伝承についての「私見」 国東文麿。第十回（38・11）豆について 加藤諱。第十一回（38・11）つれづれ草の一節「人のめたつ」「人のめだつ」について 白石大二。第十二回（38・12）たどりて よみ方式。鑑賞はありえない 時枝誠記（討論会形式。早稲田大学国語教育学会と共催）。第十二回の討論会形式が好評だったため、三十九年四月にも、「国語辞書の問題を回つて」という題で討論会を開く予定です。（桜井）